

これでいいのが福井

芸能人の親族が生活保護を受けていた問題をきっかけに、受給者への風当たりが強い。「社会に迷惑掛けるクズ」「宿主を殺す寄生虫は駆除すべき」…。ネットの掲示板には容赦ない批判が並んだ。県内でも保護世帯は増え続け、2011年度2801世帯、15年度倍増。100世帯に1世帯以上の割合だ。不正受給も増えており、16日には福井市で、保護費詐取の疑いも明るみに出た。

(柴田裕介)

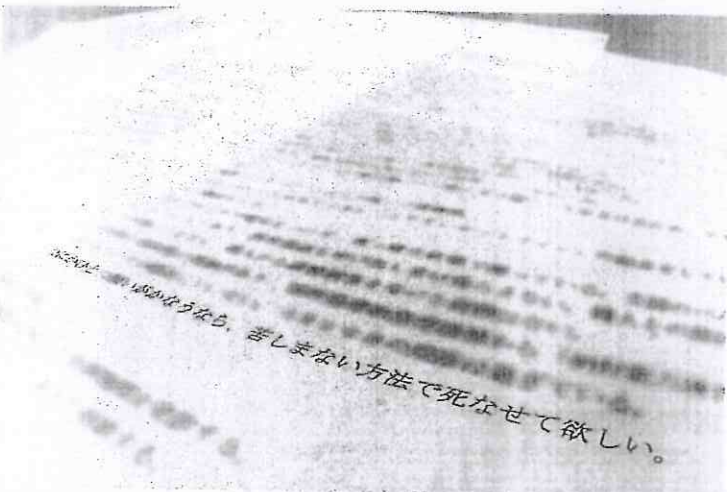
努力の果て壊れる心

生活保護① 貧困は自己責任か

ともしゃべらず勉強ばかりしていた。だから勉強が好きな誰にも負けなかった。中学を卒業した動機「一言も母に土下座して高校3年間家に置いてくれるよう頼んだ。それで授業料を免除されたこともある。ただ奨学金と、スー

續育出身の30代前半の女性が生活保護を受給したのはいく最近だ。大学時代からアルバイトや派遣の生活を続け、1人暮らしのアパートに約1年間住きこもった。働けないのに生きたいというの、自分のわがまま」と思った。どう死ぬかを考えるだけの毎日。「アパートの手すりでする練習をした。ちょうどいい高さだった」という。そんなときテレビで偶然、困窮者の電話相談を知り、生活保護申請の支援者に出会った。幼いころ、父に突き飛ばされては針刺した傷跡が、今も目立つ場所に残る。荒れた家庭だった。5歳のころ両親は離婚。母は生活保護を受給し女性を養ったが、「お前は畜生と同じ。殺らないと分らない」と女性をなじり、たたいた。

「服を買ってもらえないのが恥ずかしい。中学校では誰か



「苦しい方法で死なせてほしい」と求めた

パートのレジ打ちのアルバイトで全てもまかなう暮らしはつらかった。

そんな女性に母は仕送りを求めた。自分の家賃を滞納しながら母を援助したが、大学3年のとき限界を迎える。10万円を封筒に入れ「これで縁を切つてくれなければ自殺する」と書いて送った。自分の命を盾にするしかなかった。もう経済的にも精神的にも、大学に通つのは難しかった。大学を中退した後は、坂を駆け落ちるようになった。レジ打ちのバイトを20代半ばまで続け、ようやく就いた正社員の仕事でセクハラに遭った。「2〜3年で正社員への登用試験がある」と言われた派遣の営業事務は、4年3カ月間勤めても試験なんてなかった。30歳を過ぎ、女性は再び人生を立て直す決断をする。生活の保障はなかったけれど、思

30代女性「切り捨てないで」

い切って派遣の仕事を辞めた。年齢的にもう後がないと思つて「運転免許を取得し、中古の軽乗用車を買った。職業訓練を受けパソコンの資格も取った。化粧品を買えず、すっぴんで就職面接を受けるのが恥ずかしかった。服は3着を着回した。そうしてつかんだ仕事は、また非正規社員。「勤務3日目に突然大泣きしてしまった。なぜ泣いているのか、自分でも全然分からなかった」以来、外出できなくなつた。電氣も付けず、穴蔵のような自室にこもった。昨年春のことだ。

女性は今、生活保護で医療費が免除され、心療内科に通う。その保護申請と前後して芸能人の謝罪会見をテレビで見た。「犯罪者みたいな扱い。自分が責められているように泣いてしまった」

女性は貧困からはい上がろうとあがき、自力で穴の縁に手を掛けながら、また滑り落ちた。世間の「貧しいのは自分の責任」という風潮にたじろぐ。「生まれ落ちた環境は人によって違う。当たり前なものは何一つ、持っていない人間だっている。それを自己責任と切り捨てないで」

落ち着いて言葉を選ばない女性。将来に夢はない。「今ままで本当に生きるか死ぬかだったから、死ぬ心配のない生活がしたい」とだけ思う。